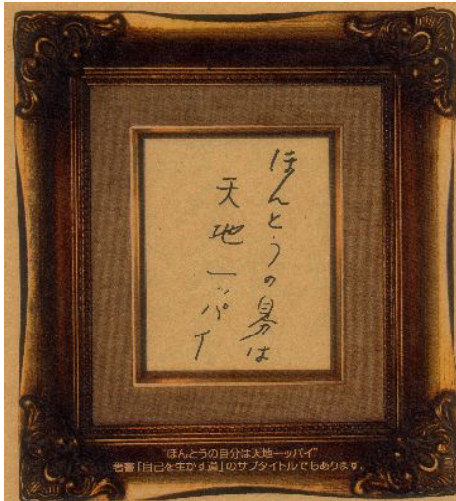


「もとはこちら」のお話し

№43 今月のテーマ はやぶさ、宇宙からの帰還

2010年(平成22年)7月17日(土)



どこにいても
何していても
常に神の掌(てのひら)の上

偉大なる自然の力によって生まれきて
生かされて生きている この命

(平井謙次作「日めくりカレンダー」より)

60億キロという、途方もない長い旅を終え、「はやぶさ」が帰って来たというニュースが飛び込んできました。2010年6月13日夜のことです。

小惑星宇宙探査機「はやぶさ」がイトカワに向けて打ち上げられたのは、2003年5月の事です。全長500メートル程で、丁度ピーナツのような形をしたその小さな惑星イトカワは、地球から20億キロも離れた所にあるそうです。ちなみに月と地球の間は、38万キロという事です。イトカワがいかに遠い所にあるかという事がよく分ります。

そんな遠い所までははやぶさは二年もの年月をかけて飛んで行って着陸し、そして予定より三年も遅れ、七年ぶりに帰って来てくれました。

様々な苦難を乗り越え、無事に地球に帰ってきたという、ただそれだけでも心躍る素晴らしいニュースなのですが、その上に、はやぶさは、イトカワの微粒子を持ち帰った可能性があるというのです。

定説を覆す^{くつがえ}

この「はやぶさ」が打上げられてから、7年後に帰還するまでの間に遭遇した数々の困難については、これまでも度々、テレビや新聞などのメディアによって報じられています。ですから、今更改めて申すまでもないかもしれませんが、この広い宇宙の中で行方不明になってしまった場合は、まず回収は困難、帰還は不可能というのが、これまでの定説だったようです。

しかし、本当に根気のいる、気の遠くなるような作業の末に、やっとの事で「はやぶさ」が発する小さな、小さな電波を捉える事ができ、そのお陰で、帰還は不可能というこれまでの定説を覆し、今回の快挙を成し遂げることができたのです。

また、姿勢制御装置の故障や相次ぐ燃料もれ、イオン電池の不具合など、次々と襲いかかる困難を、一つひとつ乗り越えて行った話なども報じられています。これ以外にもはやぶさの身の上には、私達の知らない数々の困難が、あったのではないかと推測されます。



北原ゆり筆

そんな中ではやぶさ帰還は、真に大きな快挙であり、日本だけではなく世界中の人々に、大きな喜びと感動を与えてくれた事と思います。そしてまた、どんな困難な中にあっても、決して諦めない事、くじけない事など、成功への熱い思いを持ち続ける事の大切さをも、改めて「はやぶさは」私達に教えてくれました。

感動的な最後の姿

それともうひとつ、私が胸を打たれたのは、このはやぶさの最後の姿でした。



困難な長い旅路をようやく終え、自分の古里である地球を目の前にしながらも、大気圏に再突入した際にバラバラになって砕け散りながら、燃え尽きてしまい、しかし、自分の魂ともいえる回収カプセルを、しっかりと地球に送り届けたという話です。

勿論、打上げに携わった技術者達は、こうある運命にある「はやぶさ」の事は、初めから分っていた筈です。

分っているからこそ、イトカワの物質が入っているだろうカプセルを、大気圏に再突入する直前に本体から分離させ、そのカプセルだけを回収するように初めから設計しているのです。

ですから、もしも「はやぶさ」に心があつたならば、「燃え尽きて本望」と言っているかもしれません。

自分に与えられた使命である、イオンエンジンと呼ばれる省エネ型の新エンジンや、地球からの指示なしで動く自動制御装置の検証などの、初期の目的を見事に果たし、そしてカプセルを無事に送り届けたのですから、何の思い残す事もないはずですよ。

しかし、この無機質で、心などある筈もないこの「はやぶさ」の最後の姿に、胸を熱くし涙してしまうのは、私一人ではないような気が致します。

ちょっと余談になりますが、宇宙と聞くと誰でも瞬間的に、あのはるか彼方の「無重力の所」というイメージがわくようです。しかし、そういう所だけが宇宙というわけではありません。

当たり前前の事です、宇宙以外の所などという場所は、この宇宙の中のどこにも存在する事はありません。宇宙には無重力のところもあれば、重力のあるところもあるのです。

ですから、私達のいるこの地球という場所も、当然のことながら、宇宙そのもの、宇宙その場なのです。

ところで、無重力の場というのは、一見、重力がない所のように見えます。しかしそうではありません。

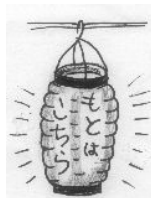
それは例えば綱引きをする時に、左右から全く同じ力で引き合うと、綱は右にも左にも行かず、同じ所でじっとしているために、引っ張られている事が分らないのと同じようなものです。一見、重力がないように見える場というのは、その場所が、四方八方から均等に引っ張られている状態にあるという事です。

重力のない場所などという所は、宇宙のどこにもありません。物体には必ず重力があり、その重力によって引力が生じます。物体が均等な圧力を受け続けると、それは圧されていよいよ小さくなり、最終的には強い引力の磁場となって、全てを飲み込むブラックホールのような存在となるのです。

またいわゆる物だけでなく、想いや感情などという目には見えないものも、波動という力となって磁場が生じます。そしてまた重みのある言葉というような言葉がありますが、これも単なる言葉の上での比喩ではなく、実際に強い力を持つ波動となって、人の心に強く響くものだと思います。

不可思議な存在

話を元に戻します。



あのはやぶさが持ち帰った砂が、たった一粒でもあれば、地球の成り立ちを説明する大きな手がかりとなるという事です、この話が見え通り、私達は地球に生きておりながら、地球とはどういう物かを、殆ど知りません。

そして地球の事をよく知らないと同様に、実は私達はこの自分自身の事も、本当は殆ど何も知らないのです。

この肉体がどのようにして出来たのか、そしてまたこの肉体が、

どのような事になっているのかという事などに付いても、私達が知っている事は、本当に僅かな事だけです。

例えば、肉体が精子と卵子の結合をきっかけとしてつくり上げられていくという事は分かっています。しかしではそういうシステムを、一体いつ、どこで誰が作り出したのかとなると、それは皆目、分っておりません。

また最近になってようやく遺伝子の事などが少しずつ分りかてきました。しかし、これも誰がそのような遺伝情報というようなシステムを作り出し、四つの記号でそれを書き込んでいったかとなると、これも全然分かっておりません。

肉体に秘められた細かなメカニズムが次々と明らかにされ、知れば知るほどに、その巧妙さ、かつ緻密さの一つひとつに、私達は心の底から驚かされます。このような素晴らしい出来映えの肉体が、自然に、あるいは偶然になど、出来るわけがありません。

ましてや、そのような巧妙緻密に創られたこの肉体をまとい、こころや精神等というモノを持っている「私」という存在は、なお一層不可思議なものであり、謎に包まれた存在というより他はありません。

時代の最先端に行く科学者達が、研究の果てに常にぶつかってしまふ大きな壁というのが、実はここところなのです。科学的に肉体を追求すればする程に、何か不可思議なもの、そして絶対的なあるものの存在を、私達はどうしても認めざるを得なくなってしまうのです。

近こう寄れ、近こう寄れ、何も無いわな



この不可思議な存在の謎は、いかに詳しく肉体の細部を、即ち臓器や器官や、そして細胞の一つひとつを取り出し、調べ尽くしたとしても、決して分る事ではありません。

私達人間の思慮分別や小智才覚などでは、絶対に解明できない根源的な謎がそこにあるのです。

平井先生が教えて下さったお話です。悟りを求めてきた弟子に向かって、老師いわく、「近こう寄れ、近こう寄れ」。言われて老師のそばに行つた弟子に対し、「もっと、もっと、近こう寄れ」。触れ合うほどに近くに寄つた弟子に対し、老師はこう言われます。「何も無いわな」。

どれほど近くに寄つて、目を皿のようにして見つめても、顕微鏡で見ようと、望遠鏡で見ようと、あるいは透かして見ようと、どのようにして見ようと、その見えているものの中には、何も見えません。それは何も無いからです。

この肉体の臓器や細胞などを、どれ程必死に眺め、見つめ、探しても、それを創り出した「そのもの」あるいはそれを生かし、動かしている「あるもの」の姿形が、そのもの自体の中に見える事は決してありません。

それは丁度、宇宙探査機「はやぶさ」を作ろうと考案し、綿密に設計し、そしてそれを現実に組み立て、宇宙に向けて発射した技術者達の姿そのものは、「はやぶさ」そのものの中にはなく、また、7年間もの間、成功のためにあらゆる智慧や工夫を惜しみなく出し尽くし、祈り続け、生還に導いた技術者たちのその熱い思いも、「はやぶさ」の中にも外にもみなぎっておりながら、決して「はやぶさ」その機体の中にはないというのと同じです。

ですから、はやぶさの部品の一つひとつを取り出し、詳細に分析し調べ尽くしたとしても、その部品や付属品の形や材質、そしてそれに伴う機能は分つたとしても、それを作つた人そのものについては、陰形も何も無いというのと同じなのです。

ともかく、はやぶさは7年間もの困難な旅を終えて、この地球に戻つてきてくれました。そして回収ボックスの中の物質によって、やがては地球の成り立ちの歴史が分つてくるかもしれません。

しかしそういう歴史を作り出した「それ自体」の存在は、やはりその微粒子の中には、影も形もないはずで

「近こう寄れ、近こう寄れ。何も、無いわな」です。

使命を終えて、持ち帰るもの

肉体自分の旅は、この肉体の誕生を旅の出発点とするならば、旅の終わりは肉体の死という事になります。

そしてあのはやぶさが、幾多の困難を乗り越えながら、長い、長い旅をした末に、バラバラになって燃え尽きたように、私達も人生という困難な旅を終え、いつの日かこの肉体は必ず燃え尽きるのです。

しかしあの「はやぶさ」が、自ら燃え尽きながらも、微粒子の入った回収ボックスを地球に送り届けたように、実は私達も、自分の肉体の死を越えて、しっかりと自分の大古里に持ち帰るものがあるのです。

私達は肉体という機体、道具を持って、人生という旅をしています。そしてはやぶさには、はやぶさの目的や使命があったように、私達一人ひとりにも、必ず自分に与えられた人生の目的や使命がある筈です。旅の最終目的は大悟徹底ということにあります。自分とは何ものであるのかという事をはっきりと知るといふ事です。知れば生き方が、必ず変わる筈です。大悟徹底の後にもまた次の大きな旅が始まりますが、そのことに付いてはまた別の機会に譲るとして、実は私達には忘れてならない大切な事がもう一つあるのです。

それは「はやぶさ」にははやぶさを生み出し、旅に送り出した後も、片時も目を離さずじつと見守り続けていた技術者たちがいたように、私達にも、私を生み出し、人生の旅に送り出した後も、片時も目を離さずに、じつと温かく見守り続けてくれている、その不可思議な存在があるという事です。

同行二人という言葉があります

同行二人という言葉がありますが、いついかなる時も、私達は決して一人ぼっちで寂しく旅をしているわけではありません。人間はどんな人生を送ろうと、探査機とは異なり、帰還不能ということはありません。肉体が燃え尽きた後に魂が帰る場所、それは私たちのいのちの大古里であり、私達は必ず旅の出発点に帰るのです。ですから無事に使命を終えて戻ってくる私たちをいつも待っていて下さっている

その絶対的な存在のことを忘れることなく、そして「旅の恥はかき捨て」のような恥ずかしい人生を送るのではなく、旅の間にしっかりと自然の運航の法則である「もとはこちら」を学び、その法則に則った生き方をするということが大切なのです。

「もとはこちら」を正しく学び、正しく実践するならば、生まれる前よりも必ず美しく澄んだ魂を、私達は大古里に持ち帰ることが出来るのです。そうすれば、この旅、すなわちこの人生は大成功ということになり、私達は確実にまた一步、本当の幸せに近づくことが出来るのです。



「はやぶさ」とイトカワ（宇宙航空研究開発機構資料より）

～ご案内～

この度、月報「もとはこちらのお話し」専用ホームページを開設いたしました。

バックナンバーも、順次ご覧いただけます。

また、お話し以外に、「今日の一言」のコーナーもあります。

是非お立ち寄り下さい。お待ちしております。



<http://www.motoha-kochira.com>

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也
専用HP <http://www.motoha-kochira.com>
mail: data3@motoha-kochira.com